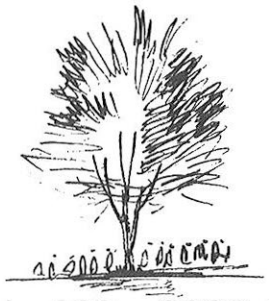
ひかりのこ

# 光の子



No.119　2006.6.25

●今年の聖句　神は言われる。「あなたを見放すことも、見捨てることもない。」
（ヨシュア記１：５）

「水たまりだよ」　挿絵・中島英子

「捨苗」

捨苗にわけても月の光かな
風音に敏き一と日や更衣
種俵沈めし池の暮れ残る
梁番に大きな月の浮く夜かな
年寄りの声よくひびく薬の日
苗代の寒さへ出し柩かな
桐咲くと思ひ立ちたる墓参り

黛　執
（『春野』主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンテング瑛和

# ごあいさつ

施設長　田　中　郁　夫

おかげさまで皆様方のお支えによって、二十二回目の年度を、子どもたち三十五名・職員二十二名で迎えることが出来ました。感謝です。

さて私事、この度四月一日付けをもちまして児童養護施設光の子どもの家の施設長に就任いたすことになりました。

私は、前施設長菅原先生と共に、光の子どもの家設立を志して、設立準備会の時より一緒に歩んできた者です。設立当初の激しい反対運動をも経験し、本当に大変な思いをしました。当時は、神さまがわたしたちに何を経験させようとしているのか分からず、目の前の出来事に不安と悲しみでいっぱいでした。でも、そのことが結果としてたくさんの方の祈りとお支えをいただくこととなり、現在の光の子どもの家がありますことを想い、主に感謝すると共にあらためてこの場をおかりしまして皆様方に感謝申し上げたいと思います。

私は、今まで機関紙「光の子」に文章を書いたことがありませんでした。（季節の挨拶文程度です）。今回初の挑戦となり、あまり文章書きは得意としておりませんので、これから何を書いたらよいのか大変不安です。

ここで自己紹介をさせていただきます。一九五四年生まれの五十二歳です。今まで光の子どもの家で何をしていたのかといいますと、一九八五年二月に光の子どもの家の法人認可を受けて職員採用人事を行ったのですが、私は、他の児童養護施設で児童指導員として七年間はたらいておりました（そこで菅原先生と出会っていますが今回はそのいきさつにつきましては省き後日と致します）。ここでも当然児童指導員としてはたらくことを希望していたのです。結果は採用した全員が直接処遇職希望で、誰も事務をしたがりません。準備会立ち上げから申請書類等の作成をしていた私がやることとなったのです。私には経理の経験もなく当然簿記も知らず、当時の社会福祉施設は複式簿記（現在も措置施設では使用しています）が採用されており、商業簿記とは違った独特の会計処理がなされていたのです。県からは「光の子どもの家は事務職が未経験者で大丈夫なのか」とまで言われ、また当時社会福祉施設用の会計ソフトやパソコンは高額で買えず、毎日手書きで失敗をしながら「なにくそ」と思いつつ書類を作っていました。現在ではもちろんパソコンで処理を行っています。また、小さな施設でも事業所である以上事務の処理内容は同じであり、国や県への申請書と報告書類の作成に追われ、結局二十一年間経ってしまいました。

今まで黒子に徹してきましたが、これからは、苦手な表舞台に出なければならなくなり戸惑いと不安のなかにいます。子どもたちからは「新施設長」とからかい半分に呼ばれています。

もとより微力ではございますが、皆様方のご指導ご鞭撻を得まして職責に最善を尽くしたいと念願いたしております。

つきましては前任者同様ご支援ご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

## 続・トムソーヤ達の朝　その5

日本キリスト教団東大宮教会　永野　三恵

欅の柔らかな薄緑の葉が濃い緑へと変化すると初夏が訪れる。この時期の欅は生きるエネルギーを内に貯えている中学生に似ているなと、いつも思わされる。

公立中学校の相談員の仕事は私にとってやり甲斐があったが、この三月末で辞めた。仕事には愛着もあったし、中学生が成長していく過程を見守ることは、面白く刺激的でもあった。しかし、母と孫達から私は必要とされていると強く思ったので、心は揺れたが辞める決心をした。

七月から九五歳になる母は高齢ながら健康に恵まれ、自立した生活を浜松で送っている。近くに、母をいつも大切にし心にかけ、何かと手助けをしている兄達家族が居てくれるのは心強い。しかし、私は五人兄妹のひとり娘として、兄達とは違った意味での絆が母とある。「ひとり、娘が居て本当に良かった。」という言葉を聞くと、母の元へもっと行って、一緒に楽しい時を過ごしたいと思った。また、末娘の家庭に新しい命が与えられ、この四月に元気な男の子が誕生した。娘しか育てた経験のない私は、男の子の成長を見守ることができるのも楽しみである。赤ちゃんは不思議な存在だなといつも思う。自分からは相手に何一つ働きかけはしないのに、その家庭に〝希望〟という光を与えてくれる自分ひとりでは生きていくことのできないこの小さな命は、両親をはじめ周囲の大人達から見つめられ、微笑みかけられ、名前を呼ばれ愛情を一身に受けながら『大切な存在』として大きくなっていく。

中学校の相談室で子ども達と関わる中でも『自分は大切な存在』とされていることが、どんなに重要であるかと、気付かされたことが何度もあった。

卒業式を間近に控えたある日、一通のメールが中三のA子から届いた。

『もう残すとこあと三日で卒業なんですね。永野さんには色々心配かけたし、知らないこともいっぱい教えてもらいましたよね。今まで我がままだった私に愛想をつかすことなく、関わってくれありがとうございました。いっぱい迷惑かけたけど大切にしてくれてありがとう。永野さんのこと多分ずっと忘れません。今までのことを大切に胸にしまって、これから頑張っていきます。本当にありがとうございました』

私は胸にこみあげてくるものを感じた。A子は小学校で〝ダメな子〟とレッテルを貼られ、周囲の大人を信用しない自己主張の強い子だった。学力面では一桁の足し算も指を使わなくてはできなかった。学習への関心も根気もなく、アニメや漫画、カラオケに楽しみを見い出していた。A子は鋭い感覚と言葉で大人を選別していた。初めは親切に関わっていた大人も、いずれは愛想をつかし自分から去っていくことを経験から知っていた。そうした彼女には根気強く、誠実につきあっていくしかなかった。しかし、私は何度絶望感に襲われたことか…。彼女がその場しのぎの嘘をついていることを知りながらも、その度に、そうせざるを得ないで生きてきた十五年間の彼女の環境の厳しさと大変さを思った。彼女を本気で叱り、涙を流したことも度々あった。だが少しずつ学習を続けていく中で、卒業後の進路が見え、高校への夢が叶えられた。

私の意識の中には『大切にする…』そうした思いはなく、ただただ関わり続ける、それしかなかった。でも彼女の中には自分は大切にされているという思いがあったのだと、私は初めて気付かされた。そして最後に思ってもみなかった言葉を私に伝えてくれた。かえって、人生の大切なことを彼女から私は示された思いがしている。

確かに人は、赤ちゃんも子どもも大人もそして老人も、大切にされている実感が生きていく力となり、人生への肯定感になっている。

〝わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです〟（ヨハネの手紙一　四・十九）

そうです。私たちひとりひとりが神さまから大切な存在とされています。信仰を与えられている者は、幸いこの基本的な信頼感がある。マザー・テレサの伝記に『愛の反対は憎しみではなく無関心である』と書かれていた。私たちは家庭でも学校でも会社でも、ひとりひとり大切な存在と実感できる人との関わりを持ちたいものだと切に祈り願っている。

エッセイ

# ひで子ちゃんのお絵描き

彫刻家　中島　睦雄

ひで子ちゃんが、いつごろから絵を描き始めたのか、それはわからない。多分小学生のころだということだが、目のぱっちりした、涙ぐむような表情の女の子を、比較的上手に描いたものだから、休み時間の教室で、何人かの友だちから注文を受けて、次々と描いてやっていたらしい。

「注文を受けて絵を描くなんて、すごいね。しかも子どものころから。あの天才ゴッホでさえ生前に注文によって絵を描いたことはなかったと思うよ。まして売れた作品なんて、たった一点だけ、しかもその一点はゴッホの弟のテオが買ったんだとか。それはまだ良いほうで、ゴッホが病院でお世話になったお医者さんに、お礼に絵を差し上げようとしたら"いらない"と断られたという話もあるよ。それに較べひで子ちゃんは、小学生のころから注文を受けて絵を描いていたなんて、ゴッホを凌ぐ天才じゃないのかい？」

「あら、そう？わたしそんなに大天才なんだろうか、今までちっとも知らなかった。そうするとミケランジェロやダビンチと肩を並べるくらいだったのかもね。」

こんなふざけた会話が交わされたりしてた。

子どものころに、友だちからの注文で絵を描いたなどという話は、いつの時代にも、どんなところにも、いくらでも転がっていることなのだが。

さて、そのひで子ちゃん。天才だった筈なのに、その後は鳴かず飛ばず、目立ちもせずに数十年が過ぎてしまった。しかし、元来描くことが好きだったから、今でも少しずつ描いている。

五月の末から六月の初めのころ、東京八重洲あたりの画廊でグループ展がある。三十人くらいのグループで、毎年この時期に実施している展覧会なのだが、もう二十回以上出品し続けている。

そんなわけでひで子ちゃんは、今年も出品しようと思い、準備にとりかかった。

先ず、何を描くのか、モチーフの選択である。小名浜あたりの魚市場まで出かけて、あれにしようかこれにしようかと、おもしろそうなのを探して歩いた。

そこで、体の小さい、足の長いカニに目をつけた。一箱に三杯入って三千円である。市場の若いお兄ちゃんは「このカニはうまいよ」と呼びかける。「味はどうでも良いんです。食べるんじゃなくて絵を描くんだから。」とひで子ちゃん。お兄ちゃんは急に表情を明るくし「俺も絵を描くんだよ。油絵、水彩、アクリルとか。」と言う。油絵水彩などは誰でも言える。しかしアクリルなんてなかなか言えない。そこで多少のやりとりをした結果、二杯で千八百円に値引きしてくれた。ただし、二杯とも足が一本根元のあたりで折れてなくなっていた。

気に入ったカニを買ってきた彼女は、早速佛壇のある部屋で描き始めた。新聞紙一ページより少し小さい画面だが、なかなか進まない。もっとも、長時間描き続けると疲れるから、コマギレで描かなくてはならない。そのうち、画面で形が少しずつはっきりしてきて色が置かれるころになってきたら、新たな問題が生じてきてしまった。カニが腐ってきたのである。もち論、殻の形や色は変わらないのだが、中味が傷んできて、ものすごい悪臭を発する。参った、参った。

そんな中でも彼女は、少しずつ描き続けた。カニのほうときたら、例の折れた足の所から、黒いドロリとした液体が流れ出て、悪臭は一段と増してきた。障子をしめ切ってみても、まわりに悪臭がただよっていく。さすがの猫たちも近寄ろうともしない。部屋中ににおいが染みこんでしまった。佛壇も恐らく、この悪臭には鼻をつまんでいるに違いない。

こんな状況の中で思い出されるのは、日本の藤田嗣浩などと共にフランスで活躍したエコールドパリの天才画家スーティンである。彼は、皮をむかれて処理された豚を天井から吊り下げて、腐ってしまって虫がわいてきても、激しく不安な色調で絵を描き続けた。そのため、その悪臭に耐えかねた近所の人々からの苦情が絶えなかったという。

幸いなことにひで子ちゃんには、近所からの苦情は来なかったのだが、身近な者たちの苦しみは並大抵なものでなかった。

本物の天才スーティンだけでなく、ニセモノの天才も、まわりに大きな迷惑を与えるものであった。





学者もどきのつぶやき ⑦1

# 韓国の旅

山形大学
学長　仙道　富士郎

今回はじめて韓国を旅した。中国を主にインドネシア、タイなどアジアの国々にはこれまでかなりの回数、仕事で訪れたことがあるが、なぜか韓国は訪れたことがなかった。五男坊の妻は韓国人だというのに。

釜山空港に到着すると、山形大学の理学部に一年留学していた大邱(Daegu)大学の学生の曺君が出迎えてくれ、荷物のバスへの運搬など手際よく進めてくれた。このときから韓国滞在の4日間、私はわが国では経験できない多くのことを見聞きし、複雑な想いで帰国することになる。

今回の訪韓の主な目的は、山形大学の理学部が協定を結んでいる大邱大学の五十周年記念式典に参加することであったが、3日間にわたるその記念行事はただ目を見張るばかりで、日本から参加した人たちは全員圧倒された形だった。おそらく五千万円ちかく掛かったのではないかという日本からの参加者たちの値踏みからも分かるように、その豪華さはとてもわが国では考えられないものであり、お金の出所はどこなのか、また五十年に一回のこととはいえ、ここまでやるインセンティヴはなへんにあるのか、お国柄の違いなのか、この大学固有のことなのか、帰国した現在まだよく理解できていない。

しかし、私が今回もっとも強い印象を受けたのはこのことではない。記念行事期間中に見られた、信じられないくらいによく統制のとれた大邱大学関係者の時間系列に応じた正確な動き方は、「恐れ入りました」と申し上げる他はなかったのである。教職員の他に学生が動員されており、話せる外国語に応じて、各国からの参加者の世話を一手に引き受けていた。各大学から1～5名位の参加者があったが、ほとんど一大学に一人の学生が付きっ切りで世話をしていた。前述の曺君は二日目の慶州へのバスツアーのときを除いては、小生たちを完全にエスコートした。学生は各グループをエスコートするだけではなく、学内ツアーの説明役を引き受けており、見学した各施設で、私たちは日本語による学生の説明を受けた。仕切りの主役を果たしていたと思われる職員に「立ち上げに随分時間が掛かったでしょうね」と切り出したところ、三ヶ月という返事が返ってきたが、とても信じられない。

もうひとつの感慨は、韓国と中国の急接近ぶりである。以前山形大学を訪問した韓国の大学の教授が、韓国からの留学生の数が一位は米国で変わりないが、二位は最近日本から中国に変わったと話していたことからある程度の予想はしていたものの、まさに「百聞は一見に如かず」のことわざ通り、今回の訪韓でそれをひしひしと身に感じさせられた。式典における各国からの参加者の紹介はまず中国から始まり、日本はかなり後の方である。しきたりを重んじる韓国で、紹介の順序はそういい加減なものではあり得ない。さらに驚かされたことに、野外での夜のエンタテーメントは、中国吉林大学の30名以上の芸術学部のプロ顔負けの歌と踊りで占められており、エンタテーメントの締めは、中国のプロのモデルによるファッションショーであった。また、李学長が中国からの関係者になにくれとなく気をつかっている様が見て取れた。

私は国と国の争いが地球上から無くなる日を夢見る一人である。しかし、「第二次世界大戦は正義の戦いだった」とか、「日本は神の国だ」とか独りよがりのことばかり言っていると、わが国はアジアの他の国との関係でまた同じ過ちを犯すのではないかと、韓国で強く感じさせられた。誰よりも若い人たちに、アジアを旅してその現状をまずは知ってほしいと思う。大人たちの戯言を聞いただけで、アジアのことを判断してはならない。

# プ・リ・ズ・ム

## 河のほとりで　倉澤家

先日、成黎を連れて川崎の私の実家へ二泊三日で行く機会がありました。

私と娘が実家に帰る度に、「僕も、ばあちゃん家行きたいなあ～。」と言っていた成黎。「今日は成黎も一緒に行くよ。」と言うと、「やったぁ！」と大喜び。

成黎が『ばあちゃん家』に行きたがる理由のベストワンは、私の両親と同居している弟の存在。実家に行くと、私になど近寄らず『浩おじちゃん』のそばから離れず、あとを追いまわしています。その間、私は少々楽が出来るのですが、せっかくの休みに成黎の相手をしてくれている弟へのお礼のビール代金がかさみます（!?）そして、ベストツーは甥っ子の持っているおもちゃ。目新しいおもちゃを次から次へと借り、大満足。ベストスリーは、じいちゃんとの触れ合い。今回は、一緒に入浴し、うんちのついたおしりを洗ってもらったそうです。

私の両親には、これまでもたくさんの子どもたちがお世話になり、二十三歳になる亜希は今でもお盆や正月には顔を見せています。

私は、大人になった今でも、会いたいと思う家族、帰りたくなる家、のあることを幸せだと思っています。

子どもたちにとって、私が、そして倉澤家が、そんな存在になりたい、と心から願っています。

倉澤　智子

## あかり窓　心理室から

庭の草木が鮮やかな緑に覆われる季節になりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

先日子ども祭りが行われました。今年度は高三が麻子ちゃん一人だけなのですが、大勢の子どもや大人の力を借りながらも、彼女が初めてリーダーシップを発揮する場となりました。麻子ちゃんが力を注いで作り上げたのは、食堂全体を使ったお化け屋敷でした。高校生グループの出し物ではあったのですが、中学生もスタッフ側に巻き込んで、当日は時間が大幅に延長になるほどの盛況ぶりで、私もおおいに楽しませてもらいました。実は、以前の麻子ちゃんは行事に参加するのも一苦労。なかなか自分から楽しめない時期がありました。でも今年の麻子ちゃんは人を楽しませようとする側に立つことができており、私は子どもの成長力を実感して満ち足りた一日を過ごすことができました。

積　みどり

## 子どもたちの季節　仙道家

新年度が始まりもう二ヶ月が経ちます。四月に一年生になった美貴は、小さな背中を覆ってしまう大きなランドセルを背負い登校しています。それとは反対に六年生になった康司は、ぐんと背が伸びてなんだかランドセルが不自然なくらい。

先日、康司が靴下を履きながら「あっ、穴縫ったね！」と一言。（もう、縫ったんだからありがとうくらい言ってよ）と思いながらも、この何気ない一言で彼の心の成長を感じました。去年の康司といえば、かかと丸見えの穴が開いた靴下を気にせず履いて「これくらい平気」と言って登校しようとしたり、「今日はちょっと暑いから～」と言って素肌にジャンパーを着てみたり…。ちょっとセンスが足りないのは別として、自分の容姿に無関心。

一年前、私がやってきて彼の担当になったときです。その頃、学校では担任の先生の変更もあり、彼を取り巻く環境はがらりと変わり、きっとそんな心の余裕もなかったのでしょう。それから一年が経ち、現在の康司には、靴下の穴だけでなく穴が縫われていることにも気付く心が備わったのです。このような生活の中で私は、何気ない子どもの一言から心の成長を感じ取ることができるように私自身の心を鍛え続けていきたいと思いました。

牧野　由紀子

## 原田家日記

真新しい制服姿の一年生を毎朝心配な想いで見送った春が過ぎ、気が付けば季節はもう夏です。新しい生活が始まって二ヶ月が過ぎたとはいえ、まだまだ慣れずに疲れた表情を見せる日々が続いています。ここでは「自分の事は自分で行う」が基本であり、加えて夕食後の食器洗い等も中高生の子ども達の役割としてお願いしています。本当ならば「毎日学校へ通う、部活動を頑張る」それだけで充分ではないだろうか？と思うのですが、年下の子どもの見本となるような生活を期待してしまう為に許容できる範囲が狭くなりがちで、疲れた背中に指導的な言葉をかけることが多くなってしまいます。それでも毎日を一生懸命に過ごし輝きを増していく子どもたちに、私たち大人も負けぬよう着実に成長してきたいと思う日々であります。

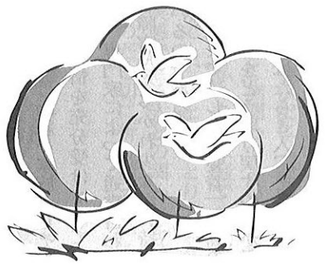
遠藤　めぐみ

## 季節のおとずれ　竹花家

我が家の双子の兄妹要と美也子はこのところ信仰心が深くなってきました。二人とも就寝時は必ず聖書の話をしてとせがみます。天地創造・ノアの箱船・ヨセフ物語・イエスのたとえ話を中心に福音的ではありませんが、落語じたてにしてお話をしています。少しふざけた分最後にお祈りは忘れません。毎週日曜日に通っている教会学校や光の子どもの家の夕礼拝でも真剣に説教者の話に耳を傾けております。そのたびに色々な質問や反応がありこちらも色々勉強しなくてはなりません。妹の美也子は「洗礼を受けたい」とことあるたびに言い出しました。「高校生になるまで待っていようよ」と言うと「何で今、受けてはいけないんだ」と答えに困る質問をしてきます。

この二人がいつまでも今のままの純粋な信仰心を持ち続けて「将来は伝道者に」などと秘かに願っております。

穴水　祐介



養護メモ 111

# 家族に関わる その12

菅原 哲男

前回は、十五年ほどここを利用した姉妹の父親が神奈川県の山間部の郷里で死亡し、かなり重篤な病態の頃親族から私宛に連絡があり、姉妹を連れて見舞い、その一週間後に亡くなった。その中で、子どもたちの親たちとの死別の割合が三十%に至る高さや親たちの死亡年齢が全て五十歳以前であったことなどを確認させられた。その事実に強い衝撃を受け、ファミリーソーシャルワーカーなどの制度が出来たから…と易々関わりはたらくことなど出来るものではないこと。家族像の痛ましいほどの状況に関わることの重さや覚悟について戒めを込めて記したものであった。

前々回の珠恵と俊子きょうだいの話に戻ろう。

祖父母にとって末娘が産んだ孫娘たちは、稼働する娘夫婦を助けるために、とりわけ乳飲み子の時から養い育てたこともあって、愛おしさや思い煩いも一方ならないものであり続けていた。これは子どもたちにとって大きな人的資源であり今後も力になってもらえるだろうと考えられた。

その後、祖父母は高齢でもあり駅前の再開発事業のために廃業し、市営住宅で祖父母ふたりの年金生活を余儀なくされるようになった。

何回となく珠恵から祖父母と手紙のやりとりがあり、珠恵の高校生活の入り口の不安定がそれによっても支えられてきている。

中学高学年での入所は多くの場合困難を極める。入所前に持った地域の学友たちとの関係が次第に細くなり消えていくことになる。そして、一緒に暮らす子どもの家での生活が定着するのに年齢が高ければ高いほど長い時間を要するのが通常である。草木の移植を例にすれば明解だろう。根を張って大木になったものほど根回しなどの作業量が増え、運ぶことだけでも大変なのである。ましてや根付き枝葉を以前よりも大きくしなければ他の者たちとの間に開きが出来てしまう。

俊子は小学生のうちにやってきていたが、それでも中学の剣道部では、竹刀を隠されたり、竹刀袋がなくなってしまったりのいじめっぽい悪戯を受けて落ち込んだりした。小学校時代からスポーツ少年団活動などで練習し合い、親たちなどのつきあいもあった地域の子どもたちと同じように学習や部活動などをするまでには相当長い時間と労苦を要したものである。

ましてや珠恵は中学三年生後半での入所である。息つく暇もなく高校進学のための準備に入り、高校入学後も地域になじむことと共に子どもの家での暮らしづくりという目まぐるしい時を過ごしたのである。

実母はもとより祖父母の関わりなしで、目指した公立高校受験を突破し、そこでの学習や部活動、そして友人との関わりなど非常に困難なのである。よくもそれを乗り越え、卒業後の目標設定までたどり着いたものだと思う。時はまさに思春期まっただ中へ突入する時期と重なってもいた。ただ、年齢が上がってから入所した子どもたちの多くは、自らの出自やその場所が如何ほどのものであったかなどについてのおおよその確認と、これからどのように生きていくべきかについての自己覚知が低年齢でやってきた子どもたちより確かなことだとも言える。

だから、どんな年齢でどんな生育過程を経てここにたどり着いたのかの情報は、そこからの暮らしを創っていく仲間としての必要最小限があれば充分なのである。それからは、「だからどうするのか」を共に考え、議論しながら創っていくことなのである。ちょうど、愛し合う若いふたりが、その生まれも育ちも殆ど分からずに、一緒に暮らすことを決心して出来ていくのが誰もがそこで生まれ育つ家庭や家族の原点であったのだから。

多くの場合、ここにやってくる子どもたちの全ては両親や家族からその時に必要な愛情を充分受けてきていなかった。専門家によって通常言われる「愛着障害」を多かれ少なかれ持ってきているのである。

障害にまで達した「愛着」の嵩のなさや少なさをどう取り戻すのかが児童養護施設のはたらき人、そしてそれに関わる家族や応援者たちが果たすべき関わりなのである。飢餓状態の愛情欲求の表現は想像を絶する。そしてそれは通常、敵対やさげすみ、暴力や暴言、非行や反社会的行動など、愛らしくもない出来れば全力で避けたいようなものなのである。全力で避けたいような愛情欲求表現をどのように受けとめ受け容れ満たしていくのかいつも問われる。そしてそれにいつも適切に応えてきたなどと決していうことの出来ないわたしたちの関わりであったことである。その関わりの間隙を家族や祖父母の存在が埋め合わせてくれていたのである。





現場から

# 続・光の子らしく ㉒

岩崎 まり子

田植えが終わり、渡ってくる風にも緑も感じます。皆様、いかがお過ごしですか。

毎年五月四日に行われる子ども祭りに今年もたくさんの卒園生たちがやってきてくれました。

「あの道入ってきて、田圃が見えてくると、ああ、帰ってきたあって思うんだよな。」

「そうそう。懐かしい！とか。」

と穏やかな表情で語り合う彼らを見ながら、私の思いは彼らとの遠い日々にとんでいきました。

今だけを知っている人にとっては想像もできないと思うのですが、彼らにも怒りにまかせて怒鳴り散らし、職員を殴り、壁にこぶしで穴を開け、「関係ねえ！」を連発する日々がありました。建具屋さんが、

「こんなことする奴は、追い出しちゃえばいいんだ…。」

と苦々しく言うのを聞き、私は複雑な思いで謝りました。そして、部屋の壁、階段の壁、ダイニングの壁…と次々見事に修していく職人さんの手元を見続けていました。あの時間の中で私は、自分の力のなさに対する申し訳なさと苛立ちで一杯一杯で、彼らのもがきに伴走することなどまるで出来ていなかったことに改めて気付かされたのでした。

ここに入所せざるを得ない子どもたちは、それが何歳であろうと重たい事情を背負っています。アルコール依存症、薬物依存症、養育放棄、服役…。決して他人に誇ることの出来ない〝親の事情〟は、子どもたちのセルフイメージを下げることはしても上げることはないでしょう。思春期になり自分と向き合い、自分の将来を考えてしまう時のもがきは、想像もつきません。当時の彼らの暴力的な行動は必然的なものだったし、それをうまく導けなかった、受け止められなかったということなのでしょう。

良くも悪くも家族が与える影響はとても大きなものです。私が受け止める準備や力がなくても、子どもの表現は待ってくれません。

先日、母の日ということで二年ぶりに母と会った丘実ちゃん。会うということに決まるまで、二回の職員会議が必要でした。

「ママと暮らしてたとき、ママの友だちも居たんだ。」

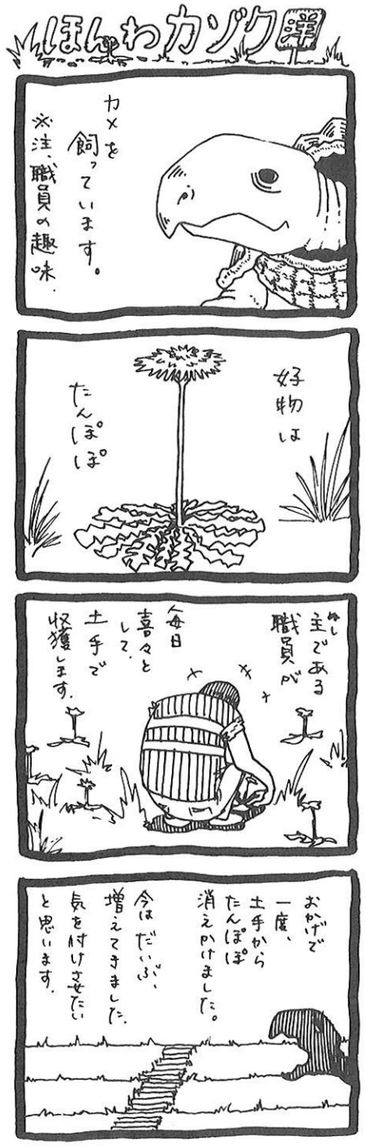
「ママと手つないだ。」

「『ママと一緒に暮らしたい？』って聞かれたから『やだ』って言った。」…丘実ちゃんのあの頃の記憶と今の思い。「ママに会いたい」という言葉と、それが現実になるときの「やだ！行きたくない！」という言葉。そのどちらもないがしろには出来ません。そして、その言葉と言葉、思いと思いの間にある思いが表現されるそのとき、しっかりと彼女を受け止め、決して逃げるまいと思っています。

実は、受け止めるということ、伴走するということが本当はどういう行動をとることなのか、今もよくわかってはいません。でも、見捨てないというメッセージだけはしっかり伝えていかなければと思っています。

丘実ちゃんが毎日のようにくれる「大好きだよ」のメッセージに応える資格はないかもしれませんが、責任はあるのです。

木の芽時といわれるこの頃は、何やら胸騒ぎがします。皆様もどうぞご自愛下さいますように。



今年度も皆さまのご協力により、
6月3日にバザーを行うことができました。
売り上げは、459,626円でした。
ありがとうございました。
バザー実行委員会

## 日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2006年1月1日▶3月末日

２００５年　１月
幼児５名 小学生１５名 中学生８名 高校生８名 措置外４名 計４１名

１日　元旦礼拝　２００６年の第１食をお節でいただき今年の抱負を語り合う　卒園生もたくさん駆けつけて
５日　正月気分をぶっ飛ばそう会　すき焼きで鋭気を養い３学期に向けて決意を語り合う
１９日　大利根中学校教師との懇談会を光の子どもの家で
２４日　中央児童相談所担当ＣＷが来訪し入所している子どもたちについての情報交換と協議

２月
１日　光の子どもの家の設立準備からご苦労をお願いした田中春女前理事召天二周年の礼拝と夕食の記念会
３日　埼玉県立高校入試前期試験２名が挑戦
１０日　児童養護施設あゆみ学園より職員八名来訪。
１１日　鈴木洋一・市川美保結婚式を東大宮教会で。光の子どもの家全員が参列して祝意を表す。
１４日　今年度事業計画の総括・次年度事業計画作成開始
１６日　田村様散髪ご奉仕　感謝
１８日　聖学院大学生１４名が子どもたちと交流　感謝
２７日　埼玉県立高校後期入学試験及び東洋大学入学試験
２８日　工藤きょうだい１時保護にて入所　原田家鈴木晶子保育士担当

３月
４日　ＮＨＫよりのご招待で幼児さんたちがお母さんと一緒ファミリーコンサートへ　楽しいひとときを
７日　埼玉県立高校後期入学試験合格発表及び東洋大学も全員合格の快挙　夕食時に家族や教師 ボランティア 卒園生 前職員などが駆けつけて下さりお祝い会
８日　県立高校卒業式　決定している進路へ向けて準備
児童福祉法が保障している措置延長は厚労省課長通知による難癖条件で利用できず　法人がサポート
７日　２００６年度自立支援計画開始
１１日　出発の会　女子２名男子１名が１８歳を過ぎせっかくの措置延長制度も利用することが出来ず憲一が森公子氏のご厚意により都内に住まい大学へ進学　恵子が入寮して就職　詩美がここから就職する　町長・町議会議長 後援会 しずくの会 教会 学校の教師 卒園生 前職員など大勢が駆けつけ激励と祝福を
１５日　大利根中学校卒業式　正 大の家族も参列
１９日　大利根藤幼稚園卒園式　真香
２６日　第７９回理事会(計画・予算) 施設長交代式 理事長より菅原哲男に施設長退任田中郁夫に同就任の辞令を交付 町長・町議会議長や多くのご支援者たちが駆けつけ厳粛に 光の子どもの家の第１期を終えそして第２ステージが開かれました。感謝（くら）

## 反射光

☆梅雨入が宣言され厚い雲を割る時折の日射に子どもたちが夢見る夏休みの近いことを感じ、子どもたちのチャレンジの夏の計画にせき立てられます☆おかげさまで年度替わりの緊張の時を何とか乗り越え、穏やかな落ち着いた暮らしを願うこの頃です☆日本でも世界でも子どもたちを取り巻く状況は残酷としか言いようがありません☆ここも虐待などで傷ついて逃げ込んでくる子どもたちの野戦病院のような状況が続きます☆サッカーW杯に浮かれる職員や子どもたちに世界でうめく弱い者や虐げられている人々への関心を養う機会にとも願います☆今春社会人になった若者が環境の変化に追いつけず落伍しそうになり「家に休みに帰る」と心篤い支援者に伴われて帰って来て元気に復帰しました☆暖かく誰もが帰りたくなる家にするために励みます☆この家の新たな第二期の船出☆難航の不安のなか本紙を発行してご報告することが出来ました。感謝☆引き続きのご支援を心からお願いします。（のぶ）